

と考えられたので報告する。

17 9年間で7回の切除を繰り返した後腹膜原発紡錘細胞肉腫の1例

多々 孝・植木 匡・若桑 隆二
石塚 大

厚生連刈羽郡総合病院外科

症例は男性で1997年の51歳時に右下腹部後腹膜腫瘍の診断にて膀胱壁と小腸部分切除を伴う腫瘍切除術を施行した。形態学的に紡錘細胞肉腫であったが、免疫組織化学検査にて組織型は同定できなかった。その後8ヶ月から2年6ヶ月の間隔で6回の再発を繰り返した。再発腫瘍の切除にはいずれも腸管合併切除を必要とした。再発時の症状は腫瘍の触知かCTによる指摘が主であるが、絞扼性腸閉塞症状と下血による貧血が1回ずつあった。現在までの腸管切除長は2m28cmであるが短腸症候群の症状はない。後腹膜悪性軟部腫瘍は比較的まれな疾患であるが、再発を繰り返す症例がある。長期生存を得るために積極的な再発腫瘍切除が必要であると思われた。

18 結腸癌術後、肝・肺転移、Krukenberg転移、Schnitzler転移、Sister Mary Joseph noduleを5回の手術により切除している1例

丸山 智宏・河内 保之・高橋 元子
田中 亮・嶋村 和彦・北見 智恵
西村 淳・新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

腹膜播種を伴う結腸癌症例で転移再発・切除を繰り返し6年生存中の症例を経験したので報告する。

平成13年4月下行結腸癌で左側結腸切除を行った。この際、回腸間膜に約1cmの腹膜播種を1ヶ所認め切除した。平成14年8月肺転移で切除。平成16年3月卵巣転移で切除。平成17年8月肺転移で再切除。平成18年1月肝転移で切除。平成19年1月Schnitzler転移、Sister Mary Joseph noduleを認め、いずれも切除した。他に腹膜播種、

転移はなかった。この間1-LV+5FU, UFT+LV, FOLFOX6, IFL, S-1などの化学療法を行っていた。現在再発なく、外来通院中である。

化学療法と外科的切除が奏功し、腹膜播種のある結腸癌の長期生存例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

19 異時性肝転移を認めた大腸sm癌の1例

佐々木正貴・宗岡 克樹・白井 良夫*
若井 俊文*・坂田 純*・豊島 宗厚**
島田 能史*・畠山 勝義*

新津医療センター病院外科

新潟大学大学院消化器・一般外科
学分野*

新津医療センター病院内科**

異時性肝転移を認めた大腸sm癌の1例を報告する。

症例は58歳、女性。2004年1月のCFでS状結腸のIsp型大腸癌を認めた。径25mmの病変で、sm massiveの所見を有するため、2004年2月、S状結腸切除術(D2)を施行した。病理所見はsm2, ly0, v0, n(-)であった。術後補助化学療法は施行しなかった。2006年8月腫瘍マーカーの上昇を認め、CT上右肝静脈基部および中肝静脈分岐部に接する肝転移を認めた。2006年11月拡大肝右葉切除術を施行し、病理所見では右肝静脈、中肝静脈に浸潤は認められたが、断端は陰性であった。大腸sm癌の肝転移症例は稀であり、文献的考察を加えて報告する。

20 当院における腹腔鏡下大腸手術の現況

高橋 元子・西村 淳・丸山 智宏
石川 卓・内藤 哲也・河内 保之
新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

【目的】当院では大腸癌手術の約4割が腹腔鏡下で行われている。腹腔鏡下大腸手術の現況をまとめた。

【対象】2006年12月までに当院で腹腔鏡下大腸